

いいのに、と思う私がどこかにいた」

福助「おちかさん、こんなところに……」

千歌（M）「福助さんの声がした。気のせい

かと思っただが、振り向くと……」

千歌「福助さんこそ、どうしてこんなところに……」

福助「正直に申しましょう。境内にある服織^{はとり}

神社へ、百日参りをしておるのです」

千歌（M）「服織神社は縁結びの神様だ。臆面もなく言う福助さんの想いが、胸に痛い。けれど福助さんは知らない。私の中にいる鬼を。川普請が滞ってしまったえば、私は、福助さんとはもう……そんな怖ろしいことを囁いた、私の中の鬼を……」

福助「おちかさんは、与三さんを好いとるの
でしよう？」

千歌（M）「試すように唐突に、福助さんが
言う」

福助「そう顔にかいたりしますから、わかりま
す。私はおちかさん、あなたに謝りたい。

それを知っていながら、夫婦めおとになってほしいと言うのです」

千歌「福助さん……」

福助「すぐには答えが出ぬでしょう。私は気が長いゆえ、いつまでも待ちます」

千歌「お優しいのですね……けれど叔母様が、普請が終わればすぐにと……」

福助「叔母様には、二心があるので」

千歌「二心？」

福助「私が婿養子となれば、私の家いえ、立花は、この村を合わせ持つことになるのです」

千歌「それが叔母様にとって、どんなよいことが？」

福助「この縁談は、父上がいくらか包んで叔母様に持ち込んだものです。父上にはわかっております。ここは御親藩ごしんぱん尾張様の御料地。遠からずお上が動く。さすればその後のち、ここには新田が広がり、豊かになるでしょう。だから婚儀を申し入れたのです」

千歌「……知りとうなかつたです」